

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19520432

研究課題名 (和文) 形式と意味のミスマッチを示す構文の説明を求めて

研究課題名 (英文) In search of accounts of constructions whose forms and meanings represent mismatches

研究代表者

高見 健一 (TAKAMI KEN-ICHI)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：70154903

研究代表者の専門分野：英語学・言語学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：英語学、機能的構文論、意味、構文、形式

### 1. 研究計画の概要

英語や日本語の様々な構文において、その文全体の表す意味と、その文を構成する各要素の意味の総和が、1対1には対応しない場合や、その文の形式と意味の間にズレが生じる場合が多くある。本研究では、このような形式と意味のミスマッチが観察される以下のような構文を取り上げ、そのような形式と意味のミスマッチがどのような形で説明できるかを明らかにする。そしてそれぞれの構文がどのような条件のもとで適格となったり、2つ(以上)の意味を表すというような曖昧性がなぜ生じるのかを説明することを目的とする。

- (1) 英語の構文：time-away 構文、場所句倒置構文、分裂文・疑似分裂文、疑問のターゲットと動詞句削除、主語名詞句と動詞の呼応
- (2) 日本語の構文：存在文・所有文、「何を文句を言ってるの」構文、動詞句前置構文、数量詞遊離構文
- (3) 日英語の構文：使役文、否定文、受身文

### 2. 研究の進捗状況

上の「研究計画の概要」に記した構文の形式と意味やそのミスマッチ、構文の適格性条件を考察するにあたり、まず、これまでに様々な文献で提示されている説明や代表的な例文を整理し、十分に検討した。そして次に、英語母語話者の協力に基づく例文やインターネットから実例を収集し、ハーバード大学名誉教授の久野氏とも多くの討議を重ねて、様々なタイプの例を包括的に説明できる新しい仮説を提示することに努めた。その結果、いずれの構文を説明する上でも、従来か

ら提唱されている純粋な統語的分析や、文の一部を構成する動詞の意味のみに基づく分析は不十分であり、文の意味や機能、その文が用いられる文脈等を考察する必要があることが明らかとなった。そして、これまで他の構文を説明する上で久野氏と提唱してきた「機能的構文論」によるアプローチが、これらの構文を説明する上でも不可欠であることが明らかとなった。

これまでの研究では、限られた例文に基づいてそれぞれの構文の適格性や意味と形式の一般化がなされる傾向が強かったが、本研究で母語話者やインターネットにより多くの例文を収集した結果、従来提唱されてきた分析に多くの反例や問題となる例があることが明らかとなったことは大きな成果であった。そして、このような反例や問題となる例をも含めて説明できる仮説を追及し、説明を行なって、それらを以下の「代表的な研究成果」で示すような雑誌論文や著書として発表できたことは大きな収穫であったと考えられる。

さらに、近年の統語論、意味論研究においては、本研究で考察した構文の説明に、自動詞を非能格動詞と非対格動詞の2種類に区別する「非対格性の仮説」(Unaccusative Hypothesis) が大きく関与している。しかし、このような動詞とその主語に焦点を当てた分析だけでは、上記の構文を十分に説明できず、文全体の持つ意味やその機能、その文が用いられる文脈や話し手・聞き手の了解事項などにも十分な考慮を払わなければならないことを明示的に示せたことも大きな意義があると考えられる。

### 3. 現在までの達成度

#### ①当初の計画以上に進展している

当初の研究計画では、「研究計画の概要」に示した12の構文のうち、7つを対象として考察する予定であった（time-away 構文、場所句倒置構文、分裂文・疑似分裂文、疑問のターゲットと動詞句削除、(英語の)使役文、存在文・所有文、否定文）。しかし、研究を進めるうちに、形式と意味のミスマッチを示す構文として、さらに5つ（主語名詞句と動詞の呼応、「何を文句を言ってるの」構文、動詞句前置構文、数量詞遊離構文、受身文）を考察対象として加え、研究を進展させるよう方向づけることができた。これは、英語に関しては、母語話者の Karen Courtenay 氏と Nan Decker 氏（ともに言語学 Ph.D.）からの大きな協力を得られたことと、英語と日本語の諸構文に関して、ハーバード大学名誉教授の久野氏と共同で研究を進めることができたためであると思われる。

#### 4. 今後の研究の推進方策

「研究計画の概要」に示した12の構文のうち、まだ考察が十分にできていない日英語の使役文と受身文に関して、これまでの研究成果を踏まえ、現在、多くの実例をもとに分析を進めている。また、研究成果としてまだ発表していない日本語の数量詞遊離構文と英語の場所句倒置構文に関しては、これまでの研究でその成果が発表できるようになってきたので、論文の形にまとめたいと考えている。本研究期間で残されたこの1年で、このような点を推進し、形式と意味のミスマッチを示す構文の研究の総括を行なうとともに、このようなミスマッチを示す構文として他にどのようなものがあるかをさらに考えて、それらを分析する方向を探りたいと考えている。

#### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

- (1) 高見健一 (2010) 「『何を文句を言ってるの』構文の適格性条件」、『日本語文法』10巻1号、3-19. 査読有。
- (2) 高見健一 (2009) 「Cause 使役文とその受身文」、『英語青年』154巻12号、709-712. 査読有。
- (3) 高見健一 (2009) 「機能的構文論」、『言語学の領域(I)』(中島平三(編)), 244-265. 朝倉書店. 査読有。
- (4) 高見健一・久野日章 (2008) 「日本語の動詞句前置構文」、『日本語文法』8巻2号、

54-70. 査読有。

- (5) 高見健一 (2008) 「生成文法は認知・機能文法とどのように折り合うのか」、『言語』37巻11号、72-77. 査読有。
- (6) Ken-ichi Takami (2007) “Causative and Intransitive/Transitive Verbs” *Aspects of Linguistics: In Honor of Noriko Akatsuka* (eds. by Susumu Kuno, Seiichi Makino & Susan Strauss. 199-219. Kurosio Publishers. 査読有。
- (7) 高見健一 (2007) 「英文法の『常識』は本当に正しいか」『英語教育』56巻6号、18-22. 査読有。

[学会発表] (計1件)

- (1) 高見健一 (2007) 「英語の場所句倒置構文—文中の位置と機能—」新潟大学東西言語類型論研究会。2007年12月17日、新潟大学。

[図書] (計3件)

- (1) 久野日章・高見健一 (2009) 『謎解きの英文法—単数か複数か—』くろしお出版、235ページ。
- (2) 久野日章・高見健一 (2007) 『英語の構文とその意味—生成文法と機能的構文論—』開拓社、322ページ。
- (3) 久野日章・高見健一 (2007) 『謎解きの英文法—否定—』くろしお出版、206ページ。

[その他]